

〔饅頭屋本節用集草木久〕吳竹シタダ

〔和爾雅七草木〕管竹カシタダ或云別種也、

〔書言字考節用集六植〕管竹カシタダ順和吳竹順和

〔東雅十六樹竹〕竹タケ略○中 倭名抄に、管竹は漢語抄にいふ吳竹也、クレタケといふと見えしは、即今俗にカンチクといふもの、其字の音をもて呼ぶなり、雪竹を俗に寒竹といふものには異なり、

〔和漢三才圖會八十五〕管竹 吳竹和名久禮太計初來於吳國而名之乎、又有漢竹唐竹等皆異品也、

文字集略云、管竹似篋而節茂葉滋者也、吉田兼好云、吳竹葉細河竹葉潤、

按、管甘音實中竹也、本草無管竹者、今據倭名抄則淡竹之類、小細黃潤長不過尺、人多植庭院、可以爲杖、或爲格子、櫺子、佳、

〔古今要覽稿草木〕吳竹

吳竹は古より仁壽殿前の北のかたに植られし竹にて、即淡竹カシタダの一種、細小なるもの也、故に今俗またこれをさしてはちくといひ、漢名を管竹、一名恬竹といふ、その高さ大抵一丈許にて、枝葉極めて繁茂し、其狀頗る淡竹に彷彿たりといへども、毎節却て淡竹よりも密にして高し、順朝臣の文字集略を引て、管は篋に似て、節茂り葉滋きもの也と和名いひ、兼好法師及び一條禪閣の説にも、吳竹はよの常の竹より葉細しと徒然草、榻鳴曉筆いへるは即これなり、凡吳竹の名は、古今和歌集、竹取物語等に見えたるが如く、萬葉集にはいまだその名を載ざるによれば、此竹の吳國より來れるは、平城天皇よりはるかに後の事なるべしと思ひしに、日本紀略に、弘仁四年、天下の吳竹ことごとく枯しよしみえたれば、その天皇よりも以前に此種の渡りこしものなるはしるし、されば吳竹臺、河竹臺を作られしも、そのはじめ詳ならずといへども、いと舊くよりの事なるべし、吳竹臺の竹の枝を折て、臨時祭試樂の時に、實方中將の插頭花に伐られし事は、古事談にみえ、その臺に生